

**「ウサギとタマネギ: いつものさんぼみち」 まめこ著 ゴマブックス 2007年7月発行**

日常的には詩集を繰り返し読むことが多い。詩人大岡信が16歳で詠った「夏のおもひに」は美しくも寂しい駿河湾の風景が思い浮かべられる。ただ惜しくも旭川には海がないので共感が得られなかろう。次には紀行文も好きだ。現地のもわっとしたにおいを感じさせるものが特によく、金子光晴の「マレー蘭印紀行」のようなちゃんとした？ものから、下川裕治の例えば「12万円で世界を歩く」のようにやたらぎゅうぎゅうのバスと硬い電車の席ばかりが出るのもよい。数年の間は海外に出ることも儘ならなかったが、やはり学生の内に広い世界を見てほしいと思う。特に南国がよい。目が合えばニコリしてくれて、様々なことがああこれくらいでよいのだ、と思わせてくれるはずだ。近頃読んだ本では中村文則の「私の消滅」や「何もかも憂鬱な夜に」なども何か共感できる人物が出てきてとてもつらかった。これは卒業してから読んでほしい。

取り留めもなく全く違うジャンルの本の感想を述べたが、最終的に推薦したい本は表題の通りである。これは私の大切な友人が教えてくれた本である。あらすじとしてはタマネギのような見た目の鳥が、森で一人過ごしていたウサギをお母さんと思って暮らす話である。大切な誰かと過ごす尊さを教えてくれる本であり、紹介しかけた本から感じられる美しい景色も、硬い椅子も、あるいは強い絶望も、誰かと分け合いたくなる、そんな気持ちになる本である。これから皆さんはそんな誰かを見つけたり手放したりする。時に一人が良いと思う日もあるだろうが、そんな時にこの本が手元があればまた誰かと過ごすことの大切さを思い出すだろう。